



〈瓦礫化した宮城県女川町〉

震災の約1ヵ月半後、宮城県女川町の住宅地には津波で破壊された車両が積み重なる。近辺には家族の写真アルバムやランドセルなどが散乱していた。(2011年4月29日、磯前礼子撮影)



〈福島県富岡町の国道6号〉

震災から約3年9ヵ月後、ようやく国道6号は全通した。しかし、放射能による大気汚染のために、帰還困難地域では二輪車と歩行者は通行禁止。自動車も窓を開けることや停車することが禁じられる。現在、この道路を使って汚染された土壌や瓦礫が搬入されている。(2015年1月4日、磯前礼子撮影)

特集 「失われた二十年」と日本研究の未来

〈福島第一原子力発電所〉

二〇一一年三月十一日の十四時四十六分、私は名古屋大学で大学院生たちと自主ゼミでヘイドン・ホワイト『メタヒストリー』を読んでいた。高層階にいたので揺れが激しく、学生たちを連れて必死で階段を駆け足で降りた。携帯でインターネットの情報を見ると津波の予報が出ていた。その時には何が起こったのか全貌がつかめなかったが、情報から疎外された状況はその後（それこそ今に至るまで）かわりなかった。

震災から日を置かず、決まっていた講演のため台湾に来ていた私は、現地のテレビで余りに生々しい

（おそらく日本国内で

は情報規制で見ることの出来なかった）映像を見て、すっかり精神的に参ってしまった。三月十五日、たまたま日本から来ていた編集者たちから「福島第一原発の二号機の格納容器が破壊されて放射能が大量拡散し、東京周辺の人々が関西以西に避難を始めた」という〈情報〉

心をひとつに
ネバキブ アップ福島

「2011年8月 福島第一原子力発電所」（小原一真撮影）

を聞き、不安と恐怖が一気にパニックへと変わったことを、今でも鮮明に覚えている。

日本に戻り、その後すぐに今度はドイツのライプツィヒに向かい、夏の終わりまで滞在したために、私の場合、結局〈三・一一〉には遠く離れてしか関わらなかった。これに対し、小原一真さんは震災直後から現場に入って写真を撮り続けた作家だ。私のような者の経験とは決定的に違う接近性・接触性に裏打ちされた力が見る者を打ちのめす。

ここに掲げた写真も二〇一一年八月のもの。『Reset-Beyond Fukushima II 福島の彼方に』と題された写真集に収録された一枚だが、この本は日本ではなく、遠く離れたスイスの出版社から刊行されている。ここでは逆にその〈遠さ〉が小原さんの現場へのまなざしに力を与えている。

今回の特集が取り上げる〈失われた二十年〉という問題設定が、過去の栄華を惜しみ、それを取り戻そうというような幻想を批判するところに端を発していることは言うまでもないが、小原さんの写真がとらえた廃墟は、〈戦後〉という幻想が〈三・一一〉によって完膚なきまでに打ちのめされたことを静かに物語っている。私たちは〈失われた二十年〉について考える時、このことをまずは前提にせざるを得ないのである。

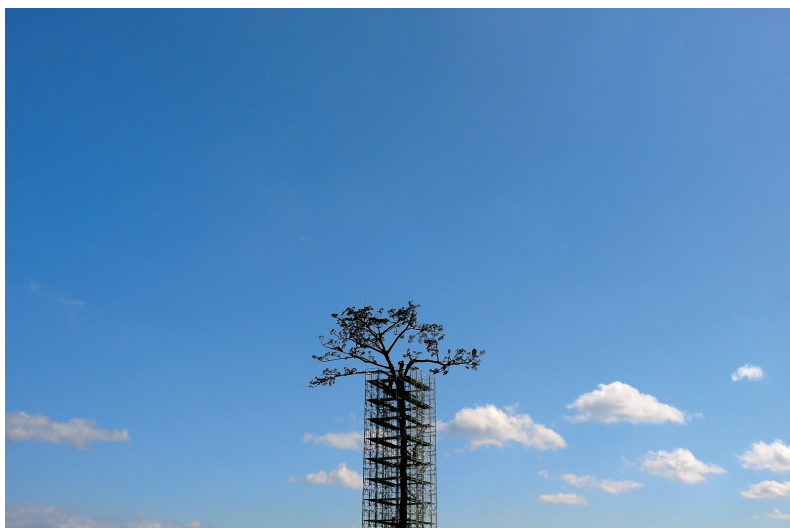
Obara Kazuma. *Reset - Beyond Fukushima: Will the Nuclear Catastrophe Bring Humanity to Its Senses?* (小原一真『福島の彼方に——原発の巨大事故は私たちを目覚めさせるだろうか?——』)
Lars Müller Publishers, 2012.

(坪井秀人)





〈おだづなよ津波!!〉
「おだづなよ」とは宮城県の方言で「ふざけるな」とか「いい加減にしろ」という意味。これを撮影したのは宮城県松島町の土産物屋。松島町は島々が自然の防波堤の役割を果たし、近隣と比較すると被害は少なかった。(2013年3月10日、倉本一宏撮影、LEICA X-1)



〈奇跡の一本松〉
大震災から2年後のこの日、海岸から3キロ近く内陸の陸前高田のバス停に降り立った。一本松までは、瓦礫と更地が広がるこの世のものならぬ風景が広がっていた。気温は-1度、あの日もそれくらいだったであろう。(2013年3月11日、倉本一宏撮影、LEICA X-1)
